

大学教育における児童文学作品の活用(2)

— 山中恒『ぼくがぼくであること』から —

Utilization of Juvenile Literature Works in University Education (2)

— Based on “I am me (Boku-ga-boku-de-aruru-koto)” by Japanese Juvenile Story Writer

YAMANAKA Hisashi —

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

(芸術教養領域)

はじめに

本誌の前号に記したとおり、児童向けとされる作品から学ぶことは多々ある¹⁾。それは子どものみならず、大人についても該当する。むしろ、大人になってから読み返したほうが、作者のねらいや、さまざまな登場人物の「気持ち」を推し量れることが増えるであろう。また、当該作品が書かれた時代背景、歴史を振り返ることも、大人は子どもよりも深く、詳しくできるであろう。よって、前号に記したように¹⁾、筆者の本務校である名古屋芸術大学におけるカリキュラム目標や、それに基づいて立てている筆者の担当授業の目標に照らしてみても児童向けとされる作品を教材活用する意義がある。

本稿では、数多ある児童文学作品のうち、山中恒の『ぼくがぼくであること』を題材に、大学における授業で活用できる内容を列挙する²⁾。これは他の大学等でも援用できると思われる。

『ぼくがぼくであること』と山中恒

『ぼくがぼくであること』は1969年、実業之日本社から出版された。その後、1976年に角川文庫（角川書店）に入り、2001年に岩波少年文庫（岩波書店）へ、2012年に角川つばさ文庫（KADOKAWA）へ収められた。角川つばさ文庫版では表紙などのイラストが現代のマンガ風になっており、現在の子どもたちに親しまれやすい形になっている。紙ベースの書籍のみならず、角川文庫（角川書店、KADOKAWA）の版は電子書籍化もされている。世代を超えて、読み継がれる作品だと出版社側も考えたのであろう。

また『ぼくがぼくであること』は映像作品にもなっている。例えば、1973年にはNHKの『少年ドラマシリーズ』でドラマ化された。このことを考えると、出版後、数年間は大きな話題になった児童文学作品と謂ってもよい。

作者の山中恒は1931（昭和6）年、北海道の小樽市で生まれ、一時期、神奈川県にいたが、戦時中の疎開で再び小樽に戻った。敗戦時、天皇に詫げるために自決を考えたほど、真面目な少年だったという。戦後に教育や教員が、その前と全く異なることを無反省に教え始めたことに疑問と不信感を抱いた。この時の不信感が、山中の作品の根底に流れ

ていると言われる。山中の小説に学校や教師が余りよく描かれていない作品が多いのも、それが大きな原因であろう。また、この重大な経験が、山中に膨大な資料で裏付けた『ボクラ少国民』シリーズ³⁾を出版させた。これは、一時期話題となった妹尾河童の『少年H』⁴⁾への疑義提示⁵⁾とも繋がっている。

山中は、早稲田大学に進学後、早大童話会⁶⁾に所属した。同会は古田足日⁷⁾、神宮輝夫⁸⁾など、著名な児童文学作家を輩出している。山中は児童文学作品を創作するようになり、1960年、『赤毛のポチ』⁹⁾で児童文学者協会新人賞を獲得した。その後、『サムライの子』¹⁰⁾で講談社児童文学新人賞佳作、『三人泣きばやし』¹¹⁾でサンケイ児童出版文化賞など、多数の賞を受けている。

『ぼくがぼくであること』のあらすじ

主人公は小学校六年生の少年、平田秀一（ひでかず）という。秀一は学業優秀な兄姉と生意気な妹に挟まれている。母親は子どもたちに良い成績を取らせ、「しがない」サラリーマンの夫（子どもたちの父親）よりも輝かしい人であって欲しいと考えている。主人公の秀一は、そうした母親の期待を裏切る存在で、家も学校も居づらい場所である。

一学期にさらに酷い成績をつけられた秀一は、家出をすることになってしまった。見知らぬ若い男が運転する軽トラックの荷台に乗り、少し離れたところで下車するつもりだった。しかし、秀一が寝込んでしまった上に、その軽トラックが轢き逃げ事件を起こしたことで、当初の計画通りには行かなくなった。轢き逃げ犯の顔を知ってしまった秀一は、その運転手（「まるじん」の正直）に見つからないよう逃げ出し、同い年の少女・夏代と、その祖父が二人で住む農家（谷村家）に助けて貰うに至る。山梨県もしくは東京都と山梨県の県境かと思われるこの土地に、武田信玄の財宝伝説もあると聞いた秀一は興味を持つ。

ある時、夏代が虫垂炎となり、入院することとなった。このときから、秀一は夏代の祖父の言動に疑問を抱くようになった。祖父は孫を囲い込み、友人を作らせないようにしていたのである。夏休みが終わりに近づいた日、秀一は謝礼を貰って家に戻った。帰宅した秀一を見て泣き叫ぶ母親に対し、秀一は以前とは異なる「可哀想だ」という感情を抱いた。秀一をバカにしていた兄姉とも対等に話すようになった。学校での教師との関係もそれまでとは少し変わった。

ある時、夏代から学校気付で、「まるじん」の正直が、自分の母親だという人に会わせる話があるが、本当だろうか、という相談の手紙が寄せられた。秀一はその母親だという女を調査することとなった。調査の結果、その女は偽物だと分かり、そのことを記した手紙を夏代に出した。しかし、その手紙は、秀一の母の言いつけ通りに動いた妹に奪われてしまう。ある時、それを知った秀一は激高し、妹を強く殴った。その直後、学生運動にかかわっていた兄が警察に捕まったという知らせが入る。これらのことを契機に、母親

に従順だった家族が、異論を口にするようになった。平田家の状況が変わっていったのである。物語の最後に、母親が気持ちと経済の拠り所にしてきた自宅が全焼し、秀一や家族は母親と新たな親子関係を結ぼうと動き始める。

授業で活用できる具体例

教養小説

この作品は、思春期にさしかかる年齢の少年が、家出や恋などのさまざまな経験を通して、親や兄姉、妹、先生を相対化し、成長していくという教養小説（Bildungsroman）である。少年（秀一）は兄弟で最下層の劣等生として扱われ、厳しい母親を恐れ、疎ましく思うだけで大きな反抗もできない。同級生や妹に反撥心を覚え、いたずらで鬱憤を晴らすだけだった。ところが、家出という経験を通じ、母親を一人の人間として捉えなおし、大人として母親に向き合うことができるようになっていく。これがストーリーの主軸である。題名も、まさしく自分が何者か、を確認する語句となっている。

このことは、筆者が所属する本務校の芸術教養領域でも重要なテーマである。自分が何者であるかを客観的にみつめ、世間や家族などの中で位置づけを行うことが教養である、と西洋中世史家の阿部謹也は述べた¹²⁾。阿部によれば、世間は日本の「社会」のようなものだが、一神教の神に対する「個人」が形成する society とは異なる。主人公の秀一は、小さな世間である家族内での関係の見直しと変化をしている点で、阿部の定義する「教養」を体現している存在である。秀一と担任教師との関係、夏代と祖父の関係も同様である。

また、「教養（Liberal Arts、元々の意味は、奴隷ではない自由民の学芸）」の言葉の一部ともなっている「自由」についても考えさせられる一節が、この作品に出てくる。家出した秀一が、親兄弟に取えて言わない秘密を心の中に持ち、「みんなの自由にならない自由」を獲得したシーンである。心の中に自由な空間を持つことは、自己や他者を客観的に見つめるために必要なプロセスでもある。

大学には、思春期にほとんど、そのような体験をしていない学生もいる。そのような学生にもこの小説は意義深い問題提起をしている。

時代背景

この作品が執筆された当時の日本は学生運動が盛んだった。それを反映した場面が描かれている。例えば、主人公の長兄が、ピラ撒きをしていた高校時代の同窓生が機動隊員に殴打されたところを止めに入り、逮捕される。次兄が高校の蔵書廃棄の責任を教師に擦り付けられたことを契機に無断欠席をするに至る。また、母親が主人公を「あんたみたいな子が、全学連になるのよ。」と説教する。今も賛否両論の、当時の社会を大きく揺るがした学生運動は、現在、この小説を読む子どもたちや学生たちからどのように捉えられるのだろうか。

また、当然のことながら、携帯電話やスマートフォン、パソコン、インターネットなどは全く出てこない。主人公の秀一と、初恋の相手である夏代の連絡手段は手書きの手紙の郵送である。封書を郵送する場面でも切手の値段が15円と、現在の五分の一以下である。角封筒やハトロ紙の封筒、便箋、書留、はがきなど、21世紀の現在、使う頻度が下がっている品名も出てくる。また、「レターフレンド」、「文通で知りあった」という、かつての「出会い」の一形態や、「スタンプを見れば、どこの郵便局のうけもちのポストに入れたか」分かる、と主人公が話す場面や、「電報で知らせる」と思いつき実行する場面もある。「下宿」で「同居人」であれば「なにになに方（かた）」と宛先を表記することなども、今は余り見られないであろう。現在の子どもを含む若者は、これを読んでどのように思うのだろうか。

この作品は1987年の国鉄の分割民営化よりも約20年前のもののため、「国鉄駅」、「国電」という言葉が出てくる。その他、「きっぷ」、「跨線橋」、「下りフォーム」、「上り電車」、「ダイヤ」、「バスの停留場」など、公共交通とその歴史に関する学びの糸口にできる言葉が出てくる。

交通に関していえば、「トラックはロウ・ギヤにきりかえた」という、一般的な自家用車でマニュアル・ミッション車がほとんど見られなくなった現在では理解困難な表現や、「簡易舗装」という言葉も出てくる。主人公の家出先に「新しい道路建設案」が出ており、それによる土地の値上がり、というエピソードもある。道路建設が進み、舗装道路も増えつつあった時代を感じさせる。

この高度経済成長期の地方の「開発」のあり方は、道路以外でも描写されている。例えば、主人公の家出先に湧出する「鉄泉」を「わかせば温泉に」でき、それを「温泉センター」として売りこみ、「キャンプ・センター」や「モーテル」を作ろうとする、という設定は、各地方でもあったことであろう。

他にも、時代を表す語が幾つもある。「(アパートの) 管理人のところのちび」、「町場の子ども」、「集金人」(銀行やカードの引き落としが今は主流)、「看護婦」(看護師ではなく)、「派出婦」、「不寝番」、「少年院」、「放浪のくせ」、「内職」、「住みこみではたらく」、主人公の長兄が「デパートの配送係へアルバイトに」行く、「寮もあり定時制にも通わせてくれる」、主人公が家出先で働いた給金を貰ったことを「児童保護法」に違反するのではないかと兄が疑義を呈する、など、ここで列挙した、人間や労働、法律などに関わる言葉の多くは、今は余り使われなくなった。

また、「ハシカで死にそこなった」、「井戸に落ちた」など昔の幼子の死に直結する話や、土曜日の午前に授業があったころの「土曜日の放課後」という言葉が出てくるのも、現在の日本の大学生にはほとんど理解しがたいことであろう。

作品に出てくる轢き逃げ事件に関し、犯人が「アリバイ工作」をしたり、彼と揉めた女の人が「サツ（警察）へたれこむ」と言い放ったりする場面もある。その女の人は「タレ

ント志望」で、水商売で生計を立て、爪が「マニキュアでまっか」で、「源氏名」という芸名のような通称を持っているという設定である。その人が、「紅茶」と「チョコレートのセット」で主人公をもてなし、「あたい学校、すきじゃなかったから」と語る。彼女は「栄荘」という名の「おんぼろアパート」に住んでいるが、経済的に成功した場合は「ばちーンとした都心のマンション」に住む、という夢も語っている。かつての、そして今も、そうした芸能界志望者はいると思われるが、「あたい」という一人称や、「サツ」という隠語、「おんぼろ」、「ばちーンとした」などの言葉を使う人は、今は滅多にいないだろう。

他にも、「そば屋で氷あずき」を主人公と母親が食べる場面や、家出先の老人が「湯ざまし」を頼む場面など、今は身近でなくなったものがある。また、「複写」、「うつし」という言葉が出てくるが、今は「コピー」と表記するだろう。「ランニングにステテコ」という服装や、赤ん坊に「白い毛糸のケープ」を着せている写真という設定、「(竹の)ものさし」、「えんぴつたて」、「ズックのバッグ」、「トランジスタ・ラジオ」、「奉公袋」、「きんちゃく(巾着)」、「メルクリンの機関車のミニチュアセット」、「外出着」、「グレーのスラックス」、「派出所」なども、耳にしたことのない若者は少なくないだろう。これらは昭和時代についてディスカッションさせるための題材となろう。

さらに主人公の秀一を苦しませる、学校の芳しくない成績評価について、「文部省」の定めた目安も説明されている。平成期の省庁再編によって、文部省は科学技術庁とともに文部科学省(文科省)となった歴史も、本稿執筆時の大半の大学生には生まれる前のこととなっている。この点でも現代史を振り返る糧ともなる。

また秀一を悩ませ、母親を「教育ママ」にしている「学歴による立身出世」という枠組みは、令和となった本稿執筆時も、まだ存在し続けている。親や祖父母の大きな期待に応えようと勉強に取り組み続け、途中でついて行けなくなり、もしくは、疲れてしまい、その枠組みから外れ、それを相対化できないまま、悩んでいる学生はかなりいる。それは筆者の本務校だけの話ではなかろう。このような、現在も続く苦しみと日本社会の近代化にどのような関係があるか、という観点でも、この作品は学生に歴史や社会を考えさせる有益な教材である。

歴史

この作品には武田信玄の話が比較的詳しく出てくる。政略結婚で生まれた武田信玄は、父・信虎との関係が非常に悪く、弟の信繁とは対照的に冷遇されていた。信虎が駿河の今川義元を訪ねたとき、信玄が父親の帰り道を封鎖し、追い払った。これらの、戦国武将に少し詳しい人ならよく知る話が引用されている。また、信玄は12歳で結婚し、子を生じたことも記されている。また信玄の埋めさせたという財宝に関連し、「古文書」という、小学生には難しい用語も出てくる。

以上のことを学生に説明すれば、この作品は、400年以上前のできごとが何故分かるのか、という歴史学の初歩や、戦国武将の政略結婚について知る契機を提供できる。

また先の大戦中の不幸なできごとや、それらに関わった人々の苦悩が、夏代の祖父の独白を通じて示されている。これらについても勉学の機会を得させることができよう。

かつての農家の暮らし、地方と都市部の住宅

主人公が家出した先の、当時の農村の描写からは、高度経済成長期の農家の暮らしぶりや、家の構造がうかがえる。

例えば、絹織物の産業が下降しつつある時代設定のなか、主人公が身を寄せた谷村家は、桑畑を所有している。カイコを飼うのは手間がかかり、生糸の値段は高くとも見合わないの、「洋野菜」や果物に多くの農家が転換しつつある、という説明が、谷村家の孫娘の口から語られる。この作品が発表された当時は、所謂、日米の繊維摩擦、繊維交渉があり、これには沖縄返還問題も関係していたといわれる。この場面は、これらの現代史を学ぶ契機ともなる。

谷村家は栗山も所有し、栗の木の周囲の下刈り（下草刈り）をしに出掛ける場面が頻出する。慣れない下刈作業で鎌を持った手に豆ができた主人公が軍手を出してもらうシーンもある。また、金ばさみを持ち、背おいかごに早生の栗を収穫する場面や、栗のイガの描写、「はしりの方が値が」高く売れること、「農業協同組合を通じて青果市場にもっていき、そこで八百屋さんたちがせて値をつける」ということなども、かつての農家以外では余り知られていないことであろう。

以上のこと以外にも、筵を干し、それを片づけたり、鶏に給餌したり、という描写もある。谷村家の当主である祖父が、消毒薬のコンプレッサーを扱い、彼の「たごだらけの手」に、深い皺が刻まれ、渋や、ヤニのようなもので黒ずんでいる、という描写も、素手で農作業を長年続けてきた人を的確に表現している。彼が所有するリヤカーに発病した孫娘を乗せて病院へ行く話も、一般家庭では考えにくい。

悪役として登場する人物が、農協の理事も務めるその土地の有力者の息子であり、それ故に農協のトラックを乗り回している設定も、今では理解しがたいことかもしれない。その悪役は「まるじん」という「屋号」の代々の「名主」の家系である、ということも、現在の都市生活者には遠い世界のことだろう。

谷村家や主人公の家、主人公が訪ねるアパートなどの家屋の描写も、学びの契機となることが多々ある。谷村の家屋には「日あたりのよいえんがわに面した、広い座敷」があり、その縁側で祖父が「タバコをくゆらせ」、柱には「すすけた古時計」がある。夏は蚊帳をつり、夜には「食用ガエル」の音が響き、雨戸を閉め、浴衣を着て、「食ぜん（膳）」で夕飯を頂く。「土間」があり、「勝手」で「みそしるの実をきざむほうちょうの音」を立てて炊事をし、玄関には「あがりかまち」があり、縁先を掃除し、土蔵に何かがあると思

われている設定だ。金へび（トカゲ類のカナヘビのこと。かなチョロとも言われる）が出てくる庭もある。

一方、都市部でサラリーマンの息子として生活する主人公の家は、茶の間、客間があり、棧が入った襖の押し入れが備わり、畳敷きの部屋もあれば、ルーバーにはいった蛍光灯に照らされるダイニング・ルーム、勉強部屋がある、という設定である。

主人公が訪れる、余り裕福ではない人々が暮らすアパートは、モルタル造りで、玄関に大きな下駄箱があり、住民もお客もここで靴を脱ぐことになっている。今はほとんど見られない形のアパートである。この建物は、中央の廊下を挟み左右に居室が並び、各部屋には「はめこみの洋服だんす」と押し入れがあるという作りである。下駄箱のある場は「くつぬぎのところ」と表現されている。水商売の女の人たちの部屋には「鏡台」があり、中にはネグリジェで寛いでいる人もいる。この人は「渋谷のバー」に勤めているという設定である。この人が、主人公が訪ねる相手と、轢き逃げ犯の口論を「痴話げんか」と表現しているが、この言葉も今は余り使われないだろう。

語句

昭和を含む近代文学に親しんでいる学生は理解できても、最近の平均的な大学生が理解できない故事成語や諺、慣用句、最近の都市部では余り耳にしない言葉が、この作品には多数出てくる。その例を以下に列挙する。

「口は災いの門である」、「ヒョウタン（瓢箪）から駒がでる」、「やぶへび（藪蛇）」、「お題目」、「とらぬタヌキの皮算用」、「油をしぼる（過失を厳しく責める）」、「将を射んとほっせば馬を射よ」、「つめのあか（爪の垢）をせん（煎）じてのませてやりたい」、「けんかにまけたイヌが遠くでほえるように（負け犬の遠吠え）」、「きりどおし（切り通し）」、「居留守」、「書院」、「黙秘権発動（だんまり戦術）」、「（人家の）灯火」、「老人」、「あまのじゃく（天邪鬼）」、「雷がおちた（叱られる）」、「正直に白じょう（白状）」、「ふしあな（節穴）を二つならべたみたいなの、気味の悪い目」、「野中（のなか）の一軒家」、「しり（尻）馬にのって」、「おぜんだて（お膳立て）してくれた」、「とほう（途方）にくれた」、「拇印」、「おいてきぼりをくって」、「亡者（もうじゃ）」、「とりはだ（鳥肌）がたつ」、「姉き（貴）」、「昏睡」、「お小水」、「自分で自分に景気でもつけないと」、「きりきりまいしていた」、「かけもち（掛け持ち）」、「とってつけたように、にいとわらってみせた」、「のら（野良）犬みたいなのやつ」、「地獄耳」、「こすっからいやつ」、「いそうろう（居候）」、「それが道理というものだ」、「親に手をあげた」、「雲がくれ」、「根ほり葉ほりいもづる（芋蔓）式に」、「はれもの（腫物）にでもさわるように」、「神妙な顔つき」、「やかましくせんさく（詮索）」、「たしなめた」、「しこたま買いこんだ」、「オニ（鬼）の首でもとったように」、「たんねん（丹念）に」、「しゃにむに（遮二無二）」、「しらみつぶし（虱潰し）に」、「こましゃくれた」、「ペテンにかけられた」、「公明正大に堂々としている」、「毛ほど

も考えなかった」、「だし（出汁）に使われている」、「あいびき（逢引）」、「かっぱらわせる」、「八つあたり」、「いたけだか（居丈高）」、「手おいのクマ（熊）」、「ヒステリィ」、「ふくれっつら（膨れっ面）」、「じか（直）でなければ」、「ブタバコ（豚箱、牢屋）」、「いいセンいってる」、「ぼたもち（牡丹餅）」、「家じゅうから反旗をひるがえ（翻）されてしまった」、「はらわたがよじれるほどおこ（怒）って」、「あとさき（後先）」も考えず、「菌の根もあわないほどの寒さ」、「鼻をつままれてもわからないほどの暗やみ」、「からだじゅう（身体中）、総毛だつような」、「しゃがれ声」、「へっぼこ」、「けしずみ（消し炭）のような柱」、「もえかす（燃え滓）」、「荒療治」、「き（着）たきりスズメ」、「重箱」、「から辛党」、「一刀彫り」、「腹ごしらえ」

以上の言葉には括弧内の漢字が当てられず、漢字表記の場合はルビ付きのものもあった。

その他

『はくがはくであること』には、以上挙げたこと以外にも、学びの契機を提供するものが多数含まれている。代表的なものを羅列していく。

谷村家の夏代が、土地と山林を狙う「まるじん」の正直に、祖父が亡くなったら、みなし子（孤児）として施設に送られてしまう、それが嫌なら、祖父の実印を書類に押すように言われた、と主人公の秀一に話すシーンがある。「みなしご」という言葉も、かつては子ども向けのアニメーション（昆虫物語みなしごハッチ）で非常に有名であったが、今はニュース番組など公共性の高い場面ではほとんど使われなくなった。また「実印」という言葉も、私事であるが、筆者はこの本を子どもの時に読むまで全く知らなかった。

谷村家の老人（夏代の祖父）が、武田信玄の財宝発見の糸口となりそうな古文書を「銀行に保管してある」という設定である。所謂「貸金庫」のことであろう。このことについても、知らない大学生は少なくないと推量される。

物語の最後に、主人公の母の失火で全焼した家について、「土地が担保」になっており、「借金のかた」である、という話が出てくる。銀行などから借金する際は、不動産を担保にすることが非常に多く、返済不能になると抵当権を貸主が主張できる、ということなども、多くの大学生は知らないであろう。

その失火の原因となったのが、「サーモスタットの故障していた電気アイロンのスイッチのきりわすれ」である。サーモスタットを知らない学生も少なくない。

全焼した焼け跡に「かんたんパネル式の家でも」建てる話が出た、という設定もある。「パネル式（パネル工法）」はプレハブ工法の一つであり、短期間で建てられるなどのメリットがあることも、少なくとも芸術大学の学生は知った方が良いであろう。また、これは一般大学でも、災害時の仮設住宅に関連させて、被災者支援について学ばせることもできる。

主人公が轢き逃げ事件の犯人を指摘できなかったのは、トラックから逃げ出した後、老

婆にぶつかったかもしれない、という、自身の「当て逃げ」の可能性があったからである。その老婆は裁判好きで「わざと示談にしないで裁判でぎゃあぎゃあ」騒ぐ人で、そのように訴訟を「やられた日にはたまらない」と表現されている。日本では平成期に司法制度が大きく変わり、ロースクール（法科大学院）も多くの大学でできたが、上手く運営されず、弁護士も余り気味と言われる。これも、日本が昔から「裁判沙汰」を嫌う社会風土、文化風土があるからだろう。そのことが、この老婆を好ましくないキャラクターとして設定する基盤となっていると考えられる。この点でも、この作品は日本の社会や文化と、司法の在り方について、学生に考えさせるのに良いテキストでもある。

大人の学びに有益な児童文学

本誌前号や本稿冒頭にも記したとおり、児童文学作品は大人が読むに値するものが多数あり、大学や生涯学習の教材としても活用する余地がある。また、精神的な自立が必要な大学生においては、いっそう重要なものである。何故ならば、思春期にすべき、家族（特に親）や教員の相対化を果たしていない「子どもっばい」学生に、児童文学は自立の契機を与えるからだ。本稿でとりあげた『ぼくがぼくであること』は、まさにその点で重要である。母親を相対化し、単に逃げることでもなく、切り捨てることでもなく、一人の対等な人間として捉え、向き合おうとする主人公のようにできれば、どれほど家族関係や、それをもとにしている人間関係全般で悩む人が減るだろうか。

今後も、さまざまな児童文学、ヤングアダルト文学、マンガなどの作品を教材化できるよう、多数の作品を渉猟したい。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および平成31（2019）年度特別研究費（課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用（前年度の継続・発展課題）」）の助成を受けた。複数の学生から現在の人気のある作品や、学生自身が影響を受けた作品を教えて貰った。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

- 1) 茶谷薫、2020、大学教育における児童文学作品の活用(1)―カニグズバーグとリンドグレーンの生涯と作品から―、名古屋芸術大学研究紀要41巻 107-121
- 2) 山中恒、2001、ぼくがぼくであること、岩波書店（岩波少年文庫086、2010年第9刷）を本稿では参照した。
- 3) 山中恒、1974、ボクラ少国民、辺境社・勁草書房。これを皮切りに、『ボクラ少国民 第二部 御民ワレ』（1975）、『ボクラ少国民 第三部 撃チテシ止マム』（1977）、『ボクラ少国民 第四部 欲シガリマセン勝ツマデハ』（1979）、『ボクラ少国民 第五部 勝利ノ日マデ』（1980）、『ボクラ少国民 補巻 少国民体験をさぐる』（1981）が出ている。それ以外にも、『ボクラ少国民と戦争応援歌』（1985、

音楽之友社）がある。

- 4) 妹尾河童、1997、少年H、講談社
- 5) 山中恒、山中典子、1999、間違いだらけの少年H 銃後生活史の研究と手引き、辺境社・勁草書房。
また、同じ著者、出版社から、2001、「少年H」の盲点 忘れられた戦時史、が出ている。
- 6) 2011、日本児童文学（日本児童文学者協会・小峰書店）7-8月合併号「特集：学生の児童文学運動い
まむかし」を参照すると、早大童話会や、その派生団体から、綺羅星の如く、多数の児童文学作家が
輩出されていることが分かる。
- 7) 1967年、日本児童文学者協会賞を受けた『宿題ひきうけ株式会社』（理論社）を代表として、『ぬす
まれた町』、『海賊島探検株式会社』、『おしきれのぼうけん』、『さくらんぼクラブにクロがきた』など
幅広い作品を著した。
- 8) 『海底二万マイル』、『コンチキ号漂流記』、『ちびくろサンボのぼうけん』、『アーサー・ランサム全集』
など、多数の翻訳作品があり、国際グリム賞、日本児童文学者協会賞、サンケイ児童出版文化賞など
を受けたことでもよく知られる。
- 9) 貧困と原爆後遺症をかかえる子どもたちと、彼らを繋ぐ犬のポチを中心にした、大人の同士の人間関
係も描かれている。
- 10) 「サムライ」といっても時代小説ではなく、貧困や親の仕事による劣等感を少女が昇華し、自分の立
場を恥じることなく生きていこうとする成長が主題である。
- 11) 辛い立場にいる三人の子どもたちを主人公とした連作。昔話の体裁で創作されている。社会の底辺に
いる人たちが、互いを思いやるだけではなく、差別をしてしまうという、現代にも通ずる問題を巧く
描いている。
- 12) 阿部謹也、1995、「世間」とは何か、講談社現代新書。同、1997、「教養」とは何か、講談社現代新
書。同、2001、学問と「世間」、岩波新書。など、阿部には多数の世間や教養に関する著作がある。